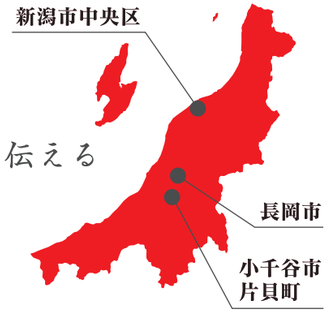
ふうど

想い｜つくる｜伝える



［Fuud］
2015
夏号
―季刊―

祈りの花火

2015 Eye's
新潟 いちばん物語

Take Free
ご自由にお持ちください

日本一長い信濃川を舞台に、世界でも知られる長岡大花火大会が毎年8月2日・3日に開催される。
蛇行する大河の両岸を埋めつくす大観衆が、夜空に次々に舞う花火と共鳴し、どよめき、揺れる。
たっぷり2時間、めくるめく興奮がつづいていく。（2014年8月2日 長岡市）

がんばろう●ニッポン!

懐かしい街なみに咲く未来

むかし 昔からの定期 いち 市 vol.06

［ごった市@ホコテン 三条市］ 文／榎本国男

三条市は、県の中央部に位置する人口約10万人の工業都市。穀倉地帯新潟平野を貫く信濃川とその支流五十嵐川の合流点に形成された町で、あけぼのは先史時代まで遡る。永徳2年（1382）の文献には〈三条七日市〉として、初めて地名が表れる。当時すでに定期市が開催され、河湊による商業交易拠点の性格をもつ地だった。現在は隣接する燕市とあわせ日本一の出荷額を誇る金属洋食器の産地。大工道具、石油ストーブ、アウトドア用品など、業界トップクラスの企業が多く立地する。そんなエネルギッシュな顔とは別に旧市街地は、歴史をまとう落ちついた門前町や昔ながらの商店街があり、入り組んだ道筋とともに魅力的な風情を保っている。市内4カ所に二・七と五・十の六斎市があり、それを知らせる現代風のポスターがそこここに貼られ、地元の六斎市への愛着と誇りを感じる。この気風とモノづくり精神が、新しい定期市＜三条マルシェ ごった市@ホコテン＞を誕生させ、育てている。「ごった」とは、「いいものが沢山」という意味の方言で、文字通り、さまざまなお店が会場を埋めている。

「三条マルシェ」を主催運営しているのは緑のTシャツを着ているメンバー、三条マルシェ実行委員会の皆さんだ。会場は、中央商店街・本寺小路～三条別院通りで、完全に歩行者天国にして冬季をのぞき毎月1回開催される。当日の会場周辺は通行止めとなり、賑わっている。公共機関や地元金融機関の駐車場が開放され、厚生福祉会館前より10分間隔でバスが会場まで送迎してくれて便利である。ごった市の様相は他所の朝市とは異なり、魚類、旬の野菜・果物等は見当たらず、出店者の思い思いの品揃えである。柏崎鯛茶漬け、カレー味の唐揚げ、かき氷、焼きラーメン&ビール、ワインと甘酒の店、ぽっぽ焼き、キッチンカーのピザ、醤油鯛焼き、富良野メロンパンと並んでいる。当日の出店は70店舗と聞いた。ハンドクラフト雑貨のグループは、自慢の袋物、木工小物、ヘアアクセサリーやリングなど小さいものオンパレードだ。これが新しいマルシェかと思わせる《パソコン教室》、わかるとできる体験教室店。一緒に歌おう歌声屋さんの元気店。足裏マッサージ体験店で早々うつ伏せになって足裏マッサージ中の人が見えた。このフランス語で朝市という意味をもつ（marchè）は、先年、国の経済産業局の呼びかけで全国に展開された。

いつの世も先駆者は若者だ。三条マルシェ実行委員会のメンバー約30人の市場についての新しいアイデア、新しい視点には、古くからの市場の形態を変えるような予見がある。県下の各所の市場にだれが足もみを思いついただろうか。カラオケも同様だ。美術品の展覧、ペットの店なども開店したりする日が来るのだろうか。それとも連綿と引きつがれてきた県下各所の定期朝市は、庶民の大事な日常生活用品のもっとも身近な提供者として、いつまでもあり続けるだろうか。六斎市とマルシェのコラボも始まっているという。

親子連れ4、5人で市場を歩いている風景は、いつ、どこでも、一幅の幸せな風景画を見せて美しい。

編集後記

日本人は花火が好きである。日本の花火は完全無欠な球体を最上級とし、日本人はその貌を愛で、夜気を引き裂く豪快な音に喝采し、その後に訪れる無音の世界から深淵な何かを感じてきた。古来、花火は信仰と深く結びついていた。とかく花火大会の華やかさや打ち上げ規模を注視しがちだが、背景に目をやると土地土地の歴史と先人の情念が見えてくる。新潟県は花火王国と言われている。でも、それは災禍の多さの裏返しなのかもしれない。東日本大震災の直後、被災地の各地で祭りや伝統芸能が、復興の狼煙として掲げられ、その激闘ぶりが全国に紹介された。あらためて伝統の意義を思い知らされたことがある。県内各地の伝統芸能も、おなじような想いで守られている。そんな県下の伝統芸能の競演〈新潟文化祭「伝統連々祭」〉が、9月6日（日）長岡市立劇場で催される。それぞれに土着的な様相を楽しむとともに、伝統が生まれた背景に想いを巡らすのも愉しい。祈りから始まった花火や伝統芸能。終戦から70年になる今夏、先人の想いが時流の歯止めになることを切に思う。（渋川）

ふうど 2015夏号 vol.29

企画編集 ふうど編集室
発行人 高橋春義
取材編集 渋川綾子
佐々木聰
写真 渡部佳則
デザイン 斎藤邉司
題字 小林 翠

発行所
ふうど編集室
まごころ印刷の 株式会社タカヨシ
■本社・工場／〒950-0141 新潟県新潟市江南区亀田工業団地1丁目3-21 TEL（025）381-2000 FAX（025）381-4800
■東京支社／〒110-0005 東京都台東区上野1丁目13-3 MYビル2F TEL（03）3837-4488 FAX（03）3837-4884
■仙台営業所／〒981-0952 宮城県仙台市青葉区中山5丁目7-32 TEL（022）303-1225 FAX（022）303-6830
■名古屋営業所／〒465-0093 愛知県名古屋市名東区一社4丁目83 ランドマーク一社501号 TEL（052）753-8080 FAX（052）753-8081
■オフィシャルサイト／http://www.takayoshi.co.jp ■商品サイト／http://www.tk-print.jp

「ふうど」はここに置いてあります
【新潟市】＜中央区＞ANAクラウンプラザホテル新潟、駅前オフィスNIIGATA、NSG学びステーション、NST、NPO法人 Made in 越後、上古町商店街、旧小澤家住宅、県立自然科学館、砂丘館、佐藤商会、佐渡汽船ターミナル、朱鷺メッセ、新潟NPO協会、新潟絵屋、新潟 加島屋本店、新潟県政記念館、新潟県庁広報展示室、新潟県立図書館、新潟国際情報大学 新潟中央キャンパス、新潟市市民活動支援センター、新潟市生涯学習センター、新潟市食育・花育センター、新潟市中央図書館、新潟商工会議所、新潟市歴史博物館、新潟ユニゾンプラザ、ピアBandai、ホテルイタリア軒、りゅーとぴあ新潟市民芸術文化会館
＜東区＞桑名病院、パティスリーカフェオルレアン ＜西区＞新潟ふるさと村、新潟大学附属図書館 ＜南区＞新潟市農業活性化推進センター ＜北区＞新潟せんべい王国、ビュー福島潟
＜江南区＞新潟市立亀田図書館 ＜西蒲区＞カードブッチ、ドメーヌ・ショオ ＜秋葉区＞カフェギャラリーやまぼうし、川内自動車、新津鉄道資料館
【新発田市】加治川地区公民館、紫雲寺地区公民館、新発田市生涯学習センター、新発田市民文化会館、新発田市立図書館、豊浦地区公民館
【長岡市】長岡市立中央図書館 【燕 市】分水ビジターサービスセンター
【出雲崎町】越後出雲崎天領の里 【湯沢町】雪国観光舎 越後湯沢温泉
【佐渡市】SADO伝統文化と環境福祉の専門学校、ホテル大佐渡
【東京都】＜渋谷区＞表参道・新潟館ネスパス ＜中央区＞ブリッジにいがた

エコプレスバインダー
針金・糊・加熱が不要な製本方法を採用し、リサイクルや怪我の危険へ配慮しています。

RICE INK
この印刷物は環境にやさしい米ぬか油を使用したライスインキで印刷しています。

右／開花した花火と観衆との大きさを見比べると花火の巨大さが想像できる。
（信濃川左岸、打ち上げ場所付近から）
中／花火のエンディング直後に沸きおこった花火師と大観衆のエール交換（光のメッセージ）。
最後まで花火を見た人だけが味わえる感動シーン。
左／いろいろな型を組みあわせたワイドスターマインに会場中がうっとり。
打ち上げが終わるや拍手の大音量が地上いっぱいに満ち、周囲からため息が漏れる。

新潟 いちばん物語
創刊以来8年目を迎えた「ふうと」
あらためて未来に伝えたい新潟の<いちばん>をご紹介します

あの日を忘れない

これから新潟県内の夜空が騒がしくなる。
あっちにも、こっちにも。地元の歴史と想いがこもった花火が暗闇をかけあがる。
夏場だけで六十七大会、およそ十万発の花火が夜空を焦がす。
そのなかで全国的に知られる、長岡市と小千谷市片貝町の花火にこめる想いを追ってみた。
そして戦後七十年を迎える、この夏。
人々を魅了する花火が新たな役割を担おうとしていた。

想い　不死鳥たちの矜持

慟哭からの出発

長岡の花火は、戦争と地震による災禍の記憶を鮮明に記している。それだけに市民の花火にかける想いは強い。昨夏、花火会場に身をおいて、ひしひしと感じた。

信濃川左岸のビルの屋上から遠望する花火会場は、開催一時間前にもかかわらず人の波に埋まり、整然と日没を待っている。その空間の広がりは圧巻。期待が高まる。七時を過ぎ会場中に設置されたスピーカーから、森長岡市長のメッセージが流れ、ホノルル市長が同席していることを告げる。周囲から拍手がわきおこり、会場の空気が一瞬のうちにひとつになる。まもなくして昭和二十年（一九四五）八月一日の長岡空襲で亡くなった千四百八十六人の人たちを慰霊する尺玉花火「白菊」があがる。残照の空に白い光の筋をぐんぐん伸ばし、大空でパッと大輪の花が咲き、少し留まり、すぐに轟音とともに消えた。一切の装飾を削いだ潔さと花火師の感性に、胸を突かれる。この「白菊」にこめた長岡の人たちの想いを目の当たりにし、その後に打ち上げられる花火にも想いがあり、何ひとつ見過ごしてはいけないような厳粛な気になる。

凄い花火の連発が始まる。いままで見たことのない超ワイドな花火が惜しげもなく、ドンドン！ドンドン！途切れることのない興奮と拍手で、食事もままならない。そして待望の新潟県中越地震復興を願うフェニックス。十カ所から豪華なスターマインが一斉に打ち上げられる。炎の柱から、これでもか、これでもかと光が乱舞し、いつしか巨大な光の壁が目の前に迫る。その光のなか身体が浮き、夢と現実が入りまじる陶酔の世界がいつまでも続いた。聞きしに勝る凄さに、復興を願う想いの強さを見る。その後も超ワイドな花火が続き、ついに光の洪水と化した花火の打ち上げで終宴の時を迎えた。すると、あたりが急に動き出した。みんながペンライトやスマホを掲げ、ある方向に向いている。そこでは二時間を戦いきった花火師たちが、両岸の客席に向かってトーチを揺らしている。それに応えるように、一人ひとりの光が揺れ大観衆の熱狂がピークに達した。鳥肌が立った。何十万の光の粒が希望の大河に見えた。

わたしたちの花火

現在の長岡まつり大花火大会は、昭和二十年の空襲で焼け野原になった二年後、復興祭である長岡まつりの花火大会として始まる。ただ長岡の大花火そのものは歴史が古く、明治十年代から小規模な花火大会が始まり、大正十五年（一九二六）には正三尺玉の打ち上げに成功している。こうした花火師の優れた技術の継承と、打ち上げに恵まれた地形的条件がリンクし、長岡は昔から花火に愛着をもつ土地柄だった。そして花火がスケールアップしていく過程をフェニックス誕生の物語が伝える。

平成十六年（二〇〇四）十月二十三日に起きた新潟県中越地震。その余震が続く翌年一月、市は長岡まつりの開催を宣言。市民が意気消沈している時だからこそ、復興への励ましと再起を誓う花火が必要だった。この決断に長岡青年会議所メンバーが奮起。復興祈願と全国からの支援に感謝の想いを込めた花火の打ち上げを決意し、その名前を長岡市の市章であり、不屈の精神を表すフェニックスとした。名前にふさわしい花火をどう創るか、花火師と協議を重ね、同時に苦労して資金を集めた。こうした奔走の結果、地震の翌年、誰もが感嘆するフェニックスが生まれた。その超ワイド花火に、多くの市民は励まされ希望をつなげることができた。同時に大花火大会の最大の呼び物になる。

長岡の花火はスポンサー花火だが、フェニックスだけは費用を募金中心に賄う、みんなであげる花火。またフェニックスの誕生物語は、「平成の米百俵」として位置づけられ、長岡青年会議所を中心に小中学校などで出前授業を実施し、次代に長岡の誇りを語り継ぐ活動を行っている。

未来永劫に開催するために

近年長岡大花火は世界的に知名度があがっている。昨年は土日開催にあたったこともあり、花火大会の観客数が過去最高の一〇三万人にのぼった。人口二十八万人の市に、その三・六倍もの人が会場に押しよせる。その大群衆を想像しただけでも、主催・運営者の苦労が偲ばれる。長岡市商工部まつり振興課の広報担当の永井英雄さんは「長岡まつりは、長岡商工会議所、長岡観光コンベンション協会のほか、JRやバスなどの公共交通機関などあらゆる関係機関が連携して対応にあたります。市の職員も現場で安全のための誘導や見守りなどを担当します。とにかく長岡の誇りである花火大会を未来永劫にわたり開催しつづけるには、無事故が絶対条件。関係者は大会が無事に終わり見物客が家路につくことを念じ、持ち場を守っています」。華やかな大会の舞台裏では、大勢の人が真剣勝負をしている。

長岡まつり大花火大会　8月2日（日）・3日（月）／夜7時20分～

感謝もうしあげます

花火が打ち上がるなか
浅原神社に参詣する人の波が
途切れることなく続く。

奉納花火の種類と奉納者、
世話人の名前が記された「番付表」。

桟敷席のお立台から、
自分たちが奉納した花火を
喝采するグループ。
〈写真／佐藤写真館 提供〉

つくる　職人気質と信仰心

ドッ・グワア〜ン！

長岡市の最南端に隣接する小千谷市片貝町は、世界一大きい四尺玉花火で知られている。毎年九月九日・十日の浅原神社秋季例大祭、通称「片貝まつり」に花火が奉納され、二日間ともフィナーレに超特大の四尺玉花火を打ち上げる。

ドンドンドン！ 打ち上げの触れ太鼓が鳴り、いよいよ世界一の花火だ。桟敷席の観客も会場周辺の町人も、耳を澄ましその瞬間を待つ。さあ点火。直径一・二メートル、重さ四百二十キロの四尺玉がヒュルヒュルと空気を切り裂き上空をめざす。「あがれ！ あがれ！ そら頑張れ！」会場から声援が飛ぶ。みんなが固唾をのんで見守るなか、高度八百メートルの地点で玉が止まり、ひと呼吸おいて超巨大な花火が開花。直径八百メートルの光の花が、西山丘陵を覆う。そしてドッ・グワア〜ン！ 山に阻まれた炸裂音が大地に響く。

桟敷席から山側にあがる花火を見る。
山に遮られた爆発音が大地に響く。

四尺玉の打ち上げに成功したのは、昭和六十年（一九八五）。以来、片貝の花火は全国的に有名になり、世界一の花火を見ようと人口五千人の町に二十万人の見物客がおしよせる。

小さな町の大きな挑戦

片貝の花火は四尺玉だけではない。二日間で二万発の花火をあげる。そのなかには明治二十四年（一八九一）、世界で初めて打ち上げに成功し、世間を驚かせた三尺玉が四発。日本でここにしか見られない真昼の三尺玉が一発。超特大花火の発祥の地としての誇りを花火に込める。さらに打ち上げる花火の大半は、尺玉という特大の花火。その数と大音量も呼び物になっている。

片貝の花火の個性は、町民がこぞって浅原神社への感謝の印として花火を奉納するという伝統的精神にある。成人、女性の厄年、男性の厄年、五十歳、還暦、古希など人生の節目に同年代の人たちが費用を出しあい共同で花火を奉納する。個人的に結婚や出産、子や孫の誕生などの祝い事にも花火をあげる。生涯、花火とともにある片貝の人々。でも、どうして片貝に花火なのか。

片貝は標高二百メートルほどの山の麓に、南北に市街地が伸びる職人の町である。江戸時代に天領だったことから花火・鍛冶・染めなど多くの職人がその保護を受けて集まり、お互いに啓発しあい技術を高めてきた。この物づくり名人の町に、当時まだ未発達だった花火がもたらされ、より面白いものを創ろうと「町人すべてが花火師」のようになり、各家で花火を手づくりし祭礼の時に奉納した。文化六年（一八〇九）に片貝の庄屋、太刀川喜右衛門があらわした「八瀬竈（やせかまど）」には、「作者が幼い頃に花火をこしらえたが、とても下手だった。それ以後研究して上手にあげられるようになった」とある。この記述から子どもの頃から花火を手づくりし奉納する習慣があったことがわかる。また昭和三十年頃まで家庭で作った花火の玉を浅原神社に奉納したという話も伝わる。こうして片貝では二百年以上前から、花火が生活のなかで普通にあり、それが心の風土になっている。花火の打ち上げの歴史も古く、享和二年（一八〇二）楯の観音堂再建工事の完成時までさかのぼる。

「花火もらいにきました」

片貝まつりには、奉納花火を打ち上げる前に「玉送り」という大切な神事がある。片貝の花火は町内の若手で構成される六つの組が、それぞれの組の町民から奉納花火を受付し花火師に世話をするシステムになっている。その昔、まだ家庭で花火玉を作っていた時代は、組の小若が家々をまわり、玉を集め、組としてひとまとめにして浅原神社に奉納していた。この玉を神社まで運ぶ行事を「玉送り」といい、道中の無事と打ち上げの成功を願い、玉を入れる玉箱に神の依り代を作り神に守ってもらいながら、いつ爆発するとも知れない玉を祈るように運んだのである。命がけで花火まつりを伝えてきた先人たちの勇気と気概を忘れないよう、また常に危険をともなう花火に油断しないように、現在も伝統的なしきたりに添った神事が行われている。

八月上旬、町の筋に大きな花火番付表が張りだされると、それまで静かだった街並みに少しずつ花火気分がもりあがり、「花火もらいにきました」と子どもたちの声が聴こえるようになる。

越後 片貝まつり　9月9日（水）・10日（木）／夜7時30分〜

つなげたい

伝える 痛みと希望の共有

平和の花火

五穀豊穣、疫病退散、殉難者への慰霊など、日本人は古来から花火に祈りをこめてきた。戦後七十年の、この夏。新潟県では、平和への願いをこめた「白菊」を県内全市町村で打ち上げ、一人ひとりが平和について考え、その思いを言葉にしようという県民キャンペーン〈ホワイト ピース プロジェクト〉が始まっている。

「白菊」は白一色の尺玉花火。長岡市では空襲の犠牲者への慰霊、焼け跡から復興させた先人への感謝、恒久平和の願いをこめ、毎年、空襲があった八月一日と長岡まつり大花火大会で打ち上げてきた。いままでハバロフスクやホノルルなどで打ち上げられたが、県内では長岡市以外の場所で平和への願いをこめた「白菊」が打ち上がるのは初めて。それも三十市町村で揃ってあげる画期的なもの。地元新聞社の新潟日報社が提唱し協力市町村と連携して事業を推進している。この歴史的な節目に、社会性の高い新聞社が平和の大切さについて、どう訴えればいいか、昨年の夏から構想し準備を進めてきた。企画を立案した広告事業本部の畑川克久さんは、「白菊」をキャンペーンの主軸にすえた大きな理由として、花火がもつ同時性をあげる。「花火大会で夜空にあがる〈白菊〉を見上げながら平和について考えるその時、自分と同じように平和を願いながら、打ち上がる〈白菊〉をじっと眺める他者の存在に気づくと思うんです。想像を働かせるとその他者の存在は、現在紛争が続いているパレスチナやシリア、かつてのパール・ハーバーまでどんどん膨らんでいきます。いまの日本は平和で、戦争は他人事のように思っていますが、世界のどこかで紛争が続いている。日本も七十年前までは戦争をしていた。〈白菊〉は、それを気づかせてくれるチカラのある花火です。戦後七十年の節目に、県内全ての市町村をつなぐことで、〈白菊〉にこめられた普遍的な思いを県民みんなで共有できたらと思いました。それから〈白菊〉の生みの親である元花火師の嘉瀬誠次さんや長岡市の森市長に打ち上げのお願いにあがり、快諾をいただいて今に至っています」。

とはいえ三十市町村への協力依頼に始まり、原稿の制作確認、「白菊」打ち上げの現場の調整、当日のセレモニー打合せなど作業量は膨大。プロジェクトチームの一員、吉澤雅史さんは「毎日、全力で走りまわっています。みなさまが大事にされている花火大会にお邪魔して、こちらの要望を通すのですから、ある意味わがままな部分もあります。でも、みなさまには理解してもらっています」。畑川さんは「大変ですが、とにかく走りぬけたいです。新潟じゅうの夜空を彩る〈白菊〉を通して、県民の平和への願いを発信したい。この〈白菊〉の輪が世界中に広がればと願っています」。そのためにも、ぜひ平和のメッセージを送ってほしいという。

長岡空襲で亡くなった人を慰霊する尺玉「白菊」。今年は県内の全市町村で開催される花火大会でも打ち上げが予定されている。〈写真／長岡市提供〉

キャンペーングッズの線香花火とポストカード。
販売早々、大勢の県民に支持され大量買いする人もいる。
収益は全て白菊の打ち上げ費用に当てられる。

共通体験があるからこそ

この八月十五日、かつての敵味方を超えて長岡花火が、あの真珠湾の夜空を彩る。真珠湾は米国ハワイ州のオアフ島にある入り江のひとつ。太平洋戦争のきっかけになった長岡市出身の山本五十六（いそろく）連合艦隊司令長官が率いる日本軍の攻撃で、壊滅的な被害を受けた場所である。多くの犠牲者が出て、攻撃を受けた十二月七日には毎年追悼式が行われている。海底には戦艦アリゾナが沈み、いまも少しずつ艦から機械油が漏れだし海面に浮かんでいる。こんな戦争の傷痕が深く刻まれている激戦地に、かつて戦った国が平和の花火をあげるのだ。歴史的には夢のようなことが現実になる。

長岡市と姉妹都市であるホノルル市ワイキキ沖の空を彩る長岡花火。過去4回打ち上げられ、今年は日本時間の8月15日と16日に真珠湾で打ち上げがある。（2015年3月 ホノルル市ワイキキ沖）〈写真／長岡市提供〉

長岡花火打ち上げは、真珠湾のあるホノルル市と長岡市で共同で実施する平和交流記念事業の一環として行われる。両市の市長は八年前から地道な交流を重ね、お互いに理解を深めあい平成二十四年（二〇一二）、姉妹都市となった。こうした信頼関係があったからこそ、歴史的な花火打ち上げが実現するのである。その背景には米軍の空襲で市街地の八割を焼失し、一方で真珠湾攻撃で被害を受け、ともに戦争で痛みと困難を味わうという共通体験があった。それでも花火に対する文化の違いが壁になり、当初は難航したようだ。日本では花火に思いを込め、華やかだが厳粛なものとして捉えている。でも欧米では花火は祝祭を賑わす演出物として考えられていて、多くの人が犠牲になった場所にお祝いの花火をあげるなんて、と反対された。しかし、長岡の花火には慰霊と平和の意味がこめられていることを説明し、理解してもらったそうだ。

長岡市はホノルル市で三月に行われるホノルルフェスティバルで「白菊」や「スターマイン」を打ち上げてきた経緯があり、この中でも「慰霊と平和の長岡花火」が浸透してきていることを感じているという。

真珠湾の花火でも、もちろん「白菊」があがる。日本時間の八月十五日、両国の戦争犠牲者の慰霊と、世界平和の願いを込めた「白菊」が三発。八月十六日には、「白菊」のほか「フェニックス」「天地人」など長岡が誇る花火が合計二千発打ち上げられる。わたしたちは、この夏、歴史的瞬間にたちあうことになる。

ちなみに日本時間の八月十五日は、長岡市でも「白菊」があがる。打ち上げは嘉瀬誠次さん。シベリア抑留時代の戦友らを現地で追悼するために創った「白菊」を、戦後七十年の終戦の日に自らの手であげる。戦争体験者のひとりとして、無月の漆黒の空に開く「平和の白菊」に他の誰よりも万感こもるものがあるのだろう。

インフォメーション

長岡まつり協議会
事務局：長岡市商工部まつり振興課
長岡市大手通2-6 フェニックス大手イースト
長岡市役所大手通庁舎6階
TEL 0258-39-2221

片貝町煙火協会
小千谷市片貝町6532-5（片貝ふるさと会館内）
TEL 0258-84-3900（4/1～10/31）

新潟日報社 広告事業本部
新潟市中央区万代3-1-1
TEL 025-385-7470

読者の声 ～前号を読んで～

弥生時代まで遡る彌彦神社

「越後一宮」というくらいだから、まあ古いんだろうな、とは思っていましたが、その歴史、弥生時代から遡るくらの長い時を経ているんですね。確かに弥彦山は新潟で一番最初に朝日が当たる場所。県内一の聖地であることを納得！ また「昔からの定期市」も、その町、その村の歴史が偲ばれ大好きな連載です。

（新潟市・50代女性）

ホワイト ピース プロジェクト　平和を願うメッセージ受付中 www2.niigata-nippo.co.jp/white-peace/